



2019年度
FUJITSUファミリー会 秋季大会
記念講演

俳優
石丸 謙二郎 氏

Profile

いしまる けんじろう 1953年生まれ。大分県出身。つかこうへい舞台「いつも心に太陽を」(1978年)でデビュー。1987年からは、テレビ朝日系「世界の車窓から」のナレーションで人気を博す。2018年より、NHKラジオ「石丸謙二郎の山カフェ」のパーソナリティー。落ち着いたトーンの声質と渋みのある演技で、テレビ・舞台・映画と幅広く活躍中。

各駅役者の旅

— 豊の国への想いと我が俳優人生 —

33年目を迎えた 『世界の車窓から』

『世界の車窓から』が1987年にスタートして32年になります。長いのか短いのかわかりませんが、自分の名前よりも「世界の車窓から」と言った数の方が多いと思います。

そもそもの企画は「世界を列車で旅する若者の話」というものでしたが、僕は当時33歳。すでに若者とは言えませんし、ナレーションと言えばアナウンサーや声優が一般的なところに、突然、名もなき俳優を連れてきたわけですから、異論もあったようです。ただ、始めてみると、「なんかあの人楽しそうだ」「今までになかった声だ」などと言ってもらえるようになりました。

この間、いろんな珍道中がありました。一度もお休みすることなく続けて来られました。今にして思えば、ケガも病気もしないというところを見抜かれて、キャストイングされたのかと思っています。

丈夫な体を支えてくれた “豊の国”大分の海と山

その丈夫な体を支えてくれたのが、故郷・大分の自然です。大分県は“豊の国”と呼ばれるだけあって、海あり山ありの自然豊かな国。僕は子どもの頃、学校が終わるとそのまま山に遊びに行き、休日には海に釣りに行く、そんな毎日を送っていました。

釣りと言っても海岸からではなく、海に櫓船かきふねをこぎ出して行きます。相撲の双葉山関や野球の稲尾選手が、櫓舟をこいだから足腰が丈夫になったと言われていますが、お2人も大分県の方。僕も同様に足腰が鍛えられました。

山でもよく遊びました。小さなおにぎり1個だけを持って、あとはアケビや桑の実、山芋などを自分で調達する。そんな生活をしていせいか、学校の先生に「将来、なりたいものは？」と聞かれて「ターザン」と答えて「それは職業じゃないでしょ」と怒られた覚えがありますね。

山への思いを振り切って “各駅役者の旅”が始まる

高校を卒業したあとは、役者になろうと日大芸術学部の演劇科に入学しましたが、やはりターザンになりたい気持ちが強くて、土日になると山に登るという生活を過ごした挙げ句、中退しました。

これではいかんと、1回、山をスパッとやめて、芝居の世界にのめり込んでいると、24~25歳のときに演出家のつかこうへいさんに出会い、舞台生活が始まりました。

ところが、29歳のときに劇団が解散。舞台中心だったので一般的な知名度はなく、名もない、収入もないという日々が続いていたときに、富士通さんから『世界の車窓から』のお話があって、そこから少しずつ仕事をいただけるようになりました。

今日のテーマは「各駅役者の旅」となっていますが、僕は俳優になってから、仕事上で「急行券」をもらったことがない。まるで各駅停車のように、少しずつ、1歩も進まず半歩ずつ進むような仕事ばかりでしたが、これが楽しいんです。各駅役者だったからこそ、いろんな経験ができた、今になって思います。

1日1つのことでは 飽き足らない“Time is 夢” で日々を楽しむ

僕はよく「多趣味」と言われますが、これは趣味とも言えず、好きなことを勝手にやっているだけ。かつては「役者は役者だけやっていたらいい」という風潮もありましたが、大分に育った僕としては、どこかターザンが捨て切れず、海や山で遊びたい。そこで37歳のときに飛びついたのがウインドサーフィン。始めたからには徹底する気質で、すぐにレースに出るようになり、10年後には日本3位になりました。

他にもスキューバダイビングや、今はやりのSUP(スタンドアップ・パドルボード)、あるいは三浦半島の海岸線をたどって地図を作ったり、各地の鍾乳洞や沖永良部島の銀水洞、富士山の噴火口などを探検したりしています。

もちろん釣りも大好きで、釣った魚をさばいて振る舞っていたら、友達が「石丸亭」と書いた法被を作ってくれました。

「石丸さん、いつお仕事されてるんですか」と質問されますが、それなりに忙しいんです。だけど1日に1個のことをするだけでは飽き足りないから、例えば午前中に山に登って、午後にウインドサーフィンをして、夜は寝泊まりできるよう改造した車で泊まって、そこから仕事に行く。おかげで時間をうまく使うということを覚えしました。「Time is マネー」じゃなくて、「Time is 夢」ですね。

何歳になっても面白いこと にチャレンジしたい

50歳近くになって、封印していた山に再び登り始めるようになり、それが高じて『石丸謙二郎の

山カフェ』というNHKのラジオ番組をやっています。そんな経験を通じて、やりたいことができなくても、ずっと夢見ていれば、いつかは実現できるということが、わかってきました。

「年寄りの冷や水」という言葉もありますが、むしろ年を重ねてから始めた方が、早く上達します。若い頃は、他にもやりたいことがありますが、高齢になると、そのことだけに集中できる。だから向上心は若いときよりも強いし、人から教わる方法もよく知っているの、何事も遅いということはないんです。

実際、僕がフリーライミングを始めたのは47歳のときで、52歳で国体の予選にも出ました。成績は悪かったんですが、そこから『SASUKE』『スポーツマンNo.1』といったスポーツ番組ともご縁ができました。

「50の手習い」とも言いますが、60歳になったときに突然スキーを始めて、今はピアノも習い始めています。若い頃にバレエや日本舞踊などダンスを習って、特にタップダンスは上達しましたが、楽器は1つもできないんです。そこで、一生に1曲ぐらい、何か楽器を弾いてみたいと思って、『月の光』というクラシック曲を教わっています。

いくつになっても、面白いことにはチャレンジすべきと教えてくれたのは、大分の海や山で遊んだ記憶と『世界の車窓から』。32年にわたっていろんな国々を見続ける中で「こんな世界があるんだ、何をやってもいいんだ」ということに気づかせてもらいました。

「肥垣越える」の 気持ちがあれば 何にでも挑戦できる

「星よりひそかに、雨より優しく」で始まる『いつでも夢を』とい

う曲がありますが、僕はこの曲の「声が聞こえる」という歌詞を、ずっと「肥垣越える」つまり「肥だめの垣根を越える」だと思い込んでいました。

僕がこの曲を初めて聴いたのは、大分の田舎で育っていた頃。当時は畑のそばに肥だめがあって、そこによく子どもが落ちて、みんなのからかいの対象になっていました。そこに垣根があればよかったわけですが、仮に垣根を作ったとしても、勇気を持って乗り越える子どもがいるんじゃないか。そのこと自体に意味はなくとも、勇気を持って肥垣を越えるんだ、「肥垣越えるんだ」と、僕の耳には、心には、そう聞こえたんです。

40歳ぐらいに、カラオケで歌詞を文字で見て、初めて本当の歌詞を知りましたが、僕はずっと「いつも心に夢を、そして勇気を持って生きていきなさい」という歌だと思って、歌ってきました。だから、今でも歌うときは、「肥垣を越える」という思いで歌っています。

僕が今、芝居をやりながらウインドサーフィンをしたり、『SASUKE』に出たりしているのも、この肥垣を越える気持ちを大事にしてきたからです。

これからも、その気持ちでピアノに挑戦しますので、どこかで僕がピアノを弾いているのを見かけたら、「そこまで上手になりましたか」とでも「まだまだですね」とでも声を掛けてもらえたら幸いです。

